学び合った コザと豊中

朝日 28 日夕刊 1 面に表題の大きな記事が掲載されていた。リードから―沖縄が米国の統治下にあった 1960～70 年代、コザ市(現・沖縄市)ののべ約 120 人の職員が日本式の地方自治を学ぶため、大阪府豊中市で研修した。「豊中学校」と呼ばれ、両市が「兄弟都市」として交流を続ける土台となった。沖縄の本土復帰 50 年で改めて注目されている。右は「豊中学校」の 1 期生を撮った写真。1965 年 12 月の撮影で、「沖縄研修生」というタイトルで保存されていた=豊中市提供。沖縄と本土自治体との交流を知るうえで示唆に富むので、記事を抜粋して紹介。

「豊中には言い尽くせないほどの恩義がある」元沖縄市職員の幸地光英さん(85)はこう語り、目を潤ませた。65 年 12 月、幸地さんは「豊中学校」に 1 期生として派遣された。当時 29 歳だった。「復帰前の沖縄の自治体は形ばかりで、予算もノウハウも足りない。本土の自治体で行政事務を学ぶことが目的だった」沖縄本島中部に位置するコザ市は戦後、人口が急増した。急速な都市化の一方で、新しいまちづくりは遅れていたという。豊中市役所では都市計画課に配置され、土地区画整理事業を実地で学んだ。当初 3 カ月だった研修期間は 6 カ月に延びた。本土と沖縄の経済格差が大きく、豊中市が宿舎を用意し、給与を支払った。持ち帰った資料は「その後の知恵袋になった」。道路台帳づくり、上下水道の整備、窓口業務の効率化など、研修は多岐にわたった。

コザ市では 70 年 12 月、米兵が起こした交通事故をきっかけに群衆が米軍関係の車両を焼き打ちしたコザ暴動が起きた。幸地さんは焼け焦げた車が連なった様子を見て、「基地依存から脱却するまちづくり」を心に誓った。幸地さんは「復帰後も米軍基地負担は減らず、日本政府にはわだかまりがあるが、豊中への感謝は忘れてはいけない」と話す。約 1200 ㌔離れたコザと豊中が結びついた背景には、沖縄戦があった。「沖縄史」によると、コザ市は 64 年、沖縄戦で肉親が亡くなった豊中市の遺族に、形見代わりの霊石とハイビスカスを贈った。当時のコザ市長の大山朝常さん(故人)の四男が豊中市にある大阪大で学んでいたことが縁だった。お返しとして、当時助役で、後に豊中市長となった竹内義治さん(同)が職員研修の受け入れを提案したという。75 年までの卒業生はのべ約 120 人を数えた。沖縄との人的交流は、豊中側にも影響を与えた。「私たちは『コザ学校』から多くの恩恵を受けた」。元豊中市副市長の田中逸郎さん(72)は語る。86 年、市自治振興課職員だった田中さんは、市主催の反核平和・戦争資料展の準備で初めて沖縄へ行った。沖縄市が橋渡しし、沖縄県立平和祈念資料館から現物資料を借りられることになり、「沖縄戦の実相展」を開くことができた。田中さんは幹部になった後は沖縄市との文化交流に力を入れた。現地訪問は約 50 回に及んだ。「アイデンティティ―を守り、多文化共生を進めてきた『コザ』から学んだことは多い」と田中さん。

(2022 年 5 月 30 日)